

吉野天人

日吉佐阿弥作

前  
都人  
里女  
ワキ  
シテ

後  
ワキ  
前に同じ

地は  
大和

「花の雲路をしるべにて。く。吉野の奥を尋ねん。

詞

「是は都方に住居する者にて候。さても我春になり候へば。こゝかしこの花を一見仕り候。中にも千本の桜を年々に詠め候。此千本の桜は。三吉野の種取りし花と承り及び候ふ間。若き人々をも伴ない。此度は和州に下向仕り候。

道行

「此春は。殊に桜の花心。く。色香に染むや深緑。糸よりかけて青柳の。露も乱るゝ春雨の。夜ふり

けるか花色の。朝じめりして氣色立つ。吉野の山に着きにけり。く。

詞

「急ぎ候ふ程に。是は早吉野の山に着きて候。御覽候へ峰も尾上も花にて候。猶々奥深く分け入らばやと思ひ候。

シテ詞

「なふくあれなる人々は何事を仰せ候ふぞ。

ワキ詞

「さん候是は都の者にて候ふが。此三吉野の花を承り及び。始めて此山に分け入りて候。又見申せば

やごとなき御姿なるが。此山中に入らせ給ふは。

如何なる人にてましますぞ。

シテ

「是は此あたりに住む者なるが。春立つ山に日を送り。さながら花を友として。山野に暮らすばかりなり。

ワキ

「実に／＼花の友人は。他生の縁と言ひながら。我等も同じ其心。

シテ

「所も山路の。

ワキ

「友なれや。

地

「見もせぬ人や花の友。／＼。知るも知らぬも花の陰に。相宿りして諸人の。いつしか馴れて花衣の。袖触れて木の本に。立ちよりいざや詠めん。實にや花の下に。帰らん事を忘るゝは。美景によりて花心。馴れ／＼初めて詠めん。いざ／＼馴れて詠めん。

ワキ詞

「如何に申すべき事の候。かやうに家路を忘れ花を

詠め給ふ事。いよ／＼不審にこそ候へ。

シテ詞

「實に御不審は御理。今は何をか包むべき。誠は我  
は天人なるが。花に引かれて來りたり。今宵はこゝ  
に旅居して。信心を致し給ふならば。其いにしへ  
の五節の舞。小忌の衣の羽袖を返し。月の夜遊を  
見せ申さん。暫くこゝに待ち給へと。

地 「夕ばえ匂ふ花の陰。／＼。月の夜遊を待ち給へ。

乙女の姿顕はして。必ずこゝに来らんと。迦陵頻

伽の声ばかり。雲に残りて失せにけり。／＼。(中入)

ワキ 「不思議や虚空に音樂聞え。異香薰じて花降れり。

地 「是れ治まれる御代とかや。いひもあへねば雲の上。  
／＼。琵琶琴、和琴、笙簫篥。鉦鼓羯鼓や糸竹の。  
声澄み渡る春風の。天つ乙女の羽袖を返し。花に  
戯れ舞ふとかや。(中の舞)

地 「乙女は幾度君が代を。／＼。撫でし巖も尽きせぬ  
や。春の花の梢に舞ひ遊び。飛び上り飛び下る。

実にも上なき君の恵み。治まる国の天つ風。雲の  
通路吹きとづるや。乙女の姿とゞまる春の。霞も  
棚引く三吉野の。吉野の山桜。うつろふと見えし  
が。又咲く花の雲に乗り。又咲く花の雲に乗りて。  
行くへも知らずぞなりにける。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第三輯」大和田建樹著